

# 共感の概念と理論、役割について

## The Concepts, theories, and roles of empathy

登 張 真 稲 \*

Maine TOBARI

**要旨：** 本稿では、最初に共感概念の歴史について概説し、主に社会心理学や発達心理学の分野における共感の代表的理論として、ホフマンの共感喚起過程についての理論と、共感の発達についての理論、共感と道徳性との関係についての理論、デイヴィスの多次元共感性の理論について説明した。この分野では、道徳性と向社会的行動における共感の役割が重視されている。次に、臨床心理学における共感概念のうち、サリヴァンとロジャーズとコフートの定義について概説した。この分野では、他者理解における共感の役割が重視されている。最後に、社会心理学等における共感の概念と臨床心理学における共感の概念との関連について検討するとともに、共感の発達と、共感が果たすその他の役割について考察した。

**キーワード：** 共感, 理論, 役割, 道徳性, 他者理解

**Key Words:** Empathy, Theories, Roles, Morality, Understanding others

### はじめに

本誌の43集では、同一視と共感との関連性について（登張, 2021）、44集では同一視と共感がヒトの発達において果たす役割について検討し（登張, 2022）、共感の概念についても説明してきたが、本稿では、共感の概念の歴史と変化について、再度整理するとともに、共感についてのさまざまな理論と、共感が果たすさまざまな役割について検討することを目的とする。

共感臨床心理学においても、社会心理学、パーソナリティ心理学、発達心理学等、心理学におけるさまざまな分野で問題にされ、重要視されてきた概念であるが、sympathyとEinfühlungという二つの起源を持つことと、さまざまな理論家や研究者がそれぞれ独自の理解と解釈を行ってきたことなどのために、多様な内容を持つ複雑な概念となり、即座には把握し難い概念となってしまう。しかし、共感とは基本的な人間の能力の一つであり、非常に身近なもので、さまざまな場面で重要な役割を果たしている。最初に、共感の概念の歴史について改めて概説する。

---

\* とばり まいね 文教大学付属生活科学研究所客員研究員

## 共感概念の歴史

共感の概念についてはじめて学問的に説明したのは、イギリスの道德哲学者ヒュームとスミスである。ヒューム（1740 石川・中釜・伊勢訳 2019）は他の心理学的概念とともに、共感（sympathy）にも言及したのだが、スミス（1759 水野訳 2003）は sympathy 概念について、特に焦点を合わせて、次のように説明した。「悲惨な状況にいる人を見て、自分自身が同じ責め苦をしのんでいるのを心に描くと、同じ情動を掻き立てられる、それは他の人々の悲惨に対する同胞感情の源泉になる」。それは、ドイツで実験心理学が成立する 100 年以上前のことで、スミスはその後、経済学に方向転換し、経済学の父とも言われるようになったが、スミスの sympathy についての説明は、現在の共感概念の説明としても役立つものである。

その後ダーウィン（1871 池田・伊谷訳 1967）は、sympathy が動物にも見られることを記述した。sympathy の概念は、創成期の心理学や社会学でも用いられるようになった。初期の著名な社会心理学者の 1 人マクドゥーガル（1908）は、一方の情動的興奮がもう一方に同様の情動的興奮を誘導することを、sympathy、または感情の共感的（sympathetic）誘導と呼び、それは動物にもヒトにも見られる社会生活における基本的に重要な相互作用の形態の一つで、その結果、身体的同化（模倣）が起こりやすいと述べた。sympathy の概念は主に社会心理学の分野でよく用いられた。

しかし、現在では、共感を表す英語としては、empathy が用いられることが多い。empathy の語源はドイツ語の Einfühlung である。これはもともと美学の分野で用いられた用語だが、リップスが心理学の用語としても用いるようになった。リップス（1906）は Einfühlung について、「他者の情動の身振りを見た人が、他者の内的身体的活動を模倣し、この身体的現象の中で他者の意識的体験を想像する、そして他者の感情を自分でも体験し、それを表現しようとする」と説明した。ティチェナー（1909）はリップスの Einfühlung を empathy と英訳し、アメリカ心理学界に紹介した。empathy の概念は主に臨床心理学や性格心理学などの分野で用いられた。なお、Einfühlung については、フロイトも著書（1921 小此木訳 1970）の中で言及している。フロイトは、同一視についての議論の中で、「同一視から模倣を経て Einfühlung と呼ばれる自分とは縁遠い他人の内面の理解に役立つ過程に当面している」と述べた。臨床心理学における empathy 概念は、同一視と関連づけたフロイトの Einfühlung の解釈からの影響も強く受けていると考えられる。

empathy の概念は、「他者の内面をその人の立場に立って考える」という役割取得の意味で用いられることが多かったが、臨床家のサリヴァンやロジャーズ、コフトらは共感についての独自の理論を発展させた。なお、sympathy と empathy の概念は類似しているが、微妙な違いがあることも指摘されている。ティチェナー（1922）は、empathy は「自分を状況の中にいると感じる傾向」を示し、sympathy は「他者と共にいると感じること」だと述べた。ウィスベ（1986）は、「sympathy は他者の苦痛を軽減したいと意識することで、empathy は他者の主観的体験を理解しようとする意識的試みを指す」と説明した。この二つの概念は現在も共存しているが、empathy のほうが優勢となっていく。

1960 年代以降、社会心理学等の分野で、empathy の概念を「他者の感情体験への代理的感情反応」というように定義する流れが生まれ、多くの研究者がその定義を用いて研究を行ったり、理論を作ったりするようになった。この定義は、sympathy の定義に類似しており、empathy と

いう概念が表す範囲が広がったと言える。主な研究者はストットランドやフェッシュバック、ホフマン、バトソン、デイヴィス、アイゼンバーグらである。これらの研究者は empathy を(代理的)感情反応として定義したが、empathy には認知的側面もあることを認識していた。

ここでは、主に社会心理学、発達心理学における共感の代表的理論であるホフマンの共感喚起過程についての理論と、共感の質的発達についての理論、および共感と道徳性との関係についての理論と、デイヴィスの多次元共感性の理論について説明し、こうした研究者の理論や研究において重視されている共感の役割について述べる。次に、臨床心理学における共感の概念について概説し、この分野で重視されている共感の役割について述べる。最後に社会心理学や発達心理学等における共感の概念と臨床心理学における共感の概念との関連について検討するとともに、共感の発達と、その他の共感の役割について考察する。

### ホフマンの共感喚起過程についての理論

ホフマンは共感が喚起される過程に注目し、共感喚起のモードには少なくとも次の6つのモードがあると述べた (Hoffman, 1984)。

1. 初期の循環反応：他児の泣き声が、内的放出メカニズムを通して乳児の泣き反応を喚起し、乳児は自分自身の泣き声に反応して泣く(反応的泣き)。
2. 古典的条件付け：他者の感情的手がかりを見たときに同じ感情が起これば、その手がかりが条件刺激となり、同様の手がかりを見ると、自分自身の中に同じ感情が喚起される。
3. 直接的連合：他者が感情を体験するのを観察すると、他者の表情や姿勢、状況の中の他の手がかりが、同様の感情が喚起された自分自身の過去の状況を思い出させ、感情が喚起される。
4. マネ：リップスが説明した共感喚起過程。他者の表情や姿勢のかすかな動きを自動的に模倣し(運動的マネ)、それが観察者の中に内的運動感覚的手がかりを生み出し、その求心性のフィードバックを通して、観察者に同じ感情を感じさせ、他者の感情を理解できるようにさせる。
5. 言語媒介的連合：犠牲者の苦痛の手がかりが言語によって伝えられる。伝えられた側は、そうしたシンボルを媒介として他者の感情を理解し、共感的に反応する。
6. 役割取得：他者が感情体験をしているのを観察し、他者がどう感じているか想像する、または、自分が他者の立場にいるとどのように感じるか想像する。

ホフマン(2000 菊地・二宮訳 2001)は、前者を他者注視的役割取得、後者を自己注視的役割取得として区別した。

### ホフマンの共感の発達についての理論

ホフマンはさらに、自己と他者の意識の分化とともに、共感が質的に変化するという理論を提唱した。ホフマン(1984)によると、他者についての認知的感覚の発達には4つの段階がある。(1) 生後1年以内の乳児は自己と他者を融合したものとして体験していることが多いだろう。(2) 1歳近くになると、他者は、自分とは物理的に区別できる別の存在であると気づくようになる。(3) 2歳になるまでに、子どもは他者が物理的に自分とは別の存在であるだけでなく、自分とは独立した内的状態を持っているという、他者に対する感覚を獲得する。これは役割取得の第1段階で、次第に複雑な状況の中で他者がどう感じているか気づくようになる。(4) 児童期後期か青年期初期までには、他者が独自の個人的アイデンティティを持つことや、その場では見えないさまざまな生活体験や内的状態を持つことに気づくようになる。

社会的認知のこの4段階を進む間に、子どもの共感異なる形で喚起されるようになる。(1) **全体的共感**：乳児がかすかに気づく他者の苦痛の手がかりは、乳児が共感によって感じる不快な感情とごっちゃになっている。乳児は自分と他者を区別できないので、他者に起きていることが自分に起きているかのように行動することがある。ある11か月児は他児が転んで泣くのを見て、泣きそうになり、自分の親指をなめ、母親の膝に顔をうずめた。(2) **自己中心的共感**：他者が自分とは異なる存在であることに気づいているが、まだ自分の内面と他者の内面を区別できない幼児は、悲しそうな大人に自分の好きな人形をあげようとして泣いたり、泣いている他児を慰めるために自分の母親を連れて来たりする。(3) **他者の気持ちへの共感**：役割取得能力を持ち始めた2-3歳以降の子どもは、他者の気持ちが自分の気持ちとは異なることに気づくとともに、他者が感じていることについての手がかりに反応するようになる。3-4歳の幼児は、単純な状況で他児が感じる喜びや悲しみを認識し反応できるようになり、言語能力が増すと、さらに多くの感情に対しても共感できるようになる。(4) **他者の一般的条件への共感**。自分と他者は、異なる生活史やアイデンティティを持つという概念を持つようになった子どもは、他者はその場だけでなく、より大きな、自分たちの生活体験の中で喜びや苦痛を感じていることに気づくようになる。そうした他者のイメージはさらに、ある集団や階層の人々（貧困や圧制を体験する人々など）の苦しみに気づき、その人々に対して共感するというように拡大する。

## ホフマンの共感と道徳性との関係についての理論

ホフマン(1987)は共感(empathy)を「自分自身よりも他の人の状況によりふさわしい感情反応」と定義し、上記の共感の質的発達に伴う道徳感情の発達について述べた。ホフマンによると、他者が自分とは異なる存在であることに気づいた子どもは、他者の苦痛を見て自分が苦痛を感じる(共感的苦痛)が、その一部は他者への関心・心配に変容し、他者に対して同情的苦痛(sympathetic distress)を感じるようになる。自分自身の苦痛を止めたいと思うとともに、他者の苦痛も止めたいと思うのである。

人は苦痛を表している人を見ると、言語的情報や非言語的情報、状況などから、原因は何か考えることがある。これを原因帰属という。手がかりから別の人が他者の苦痛の原因となったことに気づくと、共感的苦痛と被害者への同情的苦痛の一部は攻撃者への共感的怒りとなる。この場合は、自分は無実の傍観者であると感じているのだが、自分が無実の傍観者ではなく、他者の苦痛の原因となっていると感じると、罪悪感が生まれ、自分を責める。自分が属する集団が被害者を不利な立場に置いている社会制度から恩恵を受けていると感じ、罪悪感を持つ場合もある。

人はこのように他者の苦痛と自分の幸運を比べるだけでなく、他者の苦痛と別の人の幸運を比べる場合もある。非常に不利な立場にいる人と非常に贅沢に浪費している人を比べた人は、共感的な不正義(empathic injustice)を感じるかもしれない。ただし、不利な立場にいる人が不道徳で、怠惰な人であると、それはその人のせいだと思い、共感的苦痛や同情的苦痛は減るだろう。

ホフマン(1987)はさらに、道徳的判断に共感に関連する例を示した。危険な目に遇っている人や苦しんでいる人に出会ったとき、その人を助けたいという気持ちと、そのときの自分の目標を追い続けたいという気持ちの間で葛藤が起ころうがちである。こうした大部分の道徳的ジレンマには、被害者や潜在的被害者(または受益者)が含まれているため、何をすべきか考えるとき、自分自身の行為によって助かる人や傷つく人のイメージに向き合うことになり、共感が喚起され

る。これは、自分が行為者ではなく、他者の行為を判断したり評価したりしなければならない場合も同じである。

共感は大部分の道德原則と関連しているので、道德原則を活性化し、道德的判断や推論に影響を与える。道德原則と共感的感情が同時に起こると、その間に絆が生まれる。抽象的な原則は感情によってチャージ（充電）された表象—「熱い」認知、またはカテゴリーとして符号化され、貯蔵される。そして、後にこの表象にピッタリ合う出来事に遭遇すると、共感的感情反応が起こるようになるというのである。ただし共感には、身近な人や自分と似ている被害者に対して、より共感しやすい、目の状況で苦しんでいる人に対して、より共感しやすいといったバイアスがかかりやすい（Hoffman, 1987）。また、自分が所属している集団のメンバーと、他の集団のメンバーに対してでは、道德原則の適用の仕方が異なることも指摘されている。こうしたバイアスを減らすための道德教育の役割も議論されている。

### デイヴィスの多次元共感性の理論

empathy には、他者を正確に認知する知的過程であるとする見方と、他者に対する感情的反応であるとする見方の両方があるが、デイヴィス（1983）は、複数の側面を持つ多次元的概念として捉えるのがよいとして、4 側面から共感の個人差を捉える対人的反応性指標（Interpersonal Reactivity Index = IRI）を開発した。この尺度は、互いに関連するが、明らかに区別できる各側面を測定する 4 下位尺度から成る。視点取得尺度は自発的に他者の視点を取ろうとする傾向を、ファンタジー尺度は本や映画や演劇の中の架空の人物に自分自身を置き換える傾向を、共感的関心尺度は不運な他者に対する同情や心配など他者指向的感情反応をする傾向を、個人的苦痛尺度は、緊張する対人場面で個人的不安など自己指向的感情反応をする傾向を測定する尺度である。この尺度は世界中で翻訳され、最もよく用いられている特性共感尺度である。

デイヴィス（1994 菊池訳 1999）はさらに、「ある人（観察者）が他者（ターゲット）に何らかの形で遭遇した後、観察した側に認知的、感情的、行動的反応が起こる」という empathy エピソードを考え、それをもとに共感関連概念を整理する組織的モデルを提唱した。その原型のエピソードには、先行条件（観察者とターゲット、状況の特徴）と、過程（共感的結果が生み出されるメカニズム）、個人内的結果（観察者の中に生じる認知的、感情的反応）、対人的結果（ターゲットに対して向けられる行動的反応）という 4 つの関連する構成概念を確認できる。組織的

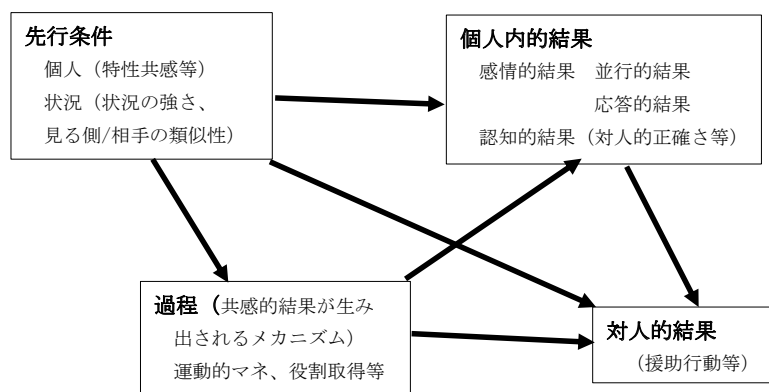


Figure 1 組織的モデル (Davis, 1994 菊池訳 1999) (一部省略)

モデルは、その4つの構成概念の関係を示すものである。Figure 1にその関係を示した。先行条件の個人的要因には特性共感等が、先行条件の状況的要因には状況の強さと、観察者とターゲットとの類似性が、過程にはホフマンが提起した共感喚起過程と共通する過程が示されている。個人内的結果には感情的結果と非感情的（認知的）結果があり、感情的結果には並行的結果（観察者がターゲットの感情を再現すること）と応答の結果（他者の状態に対する共感的反応だが、他者の感情とは異なる；共感的関心、共感的怒り）が含まれている。デイヴィスは非感情的の結果には対人的正確さが含まれるとした。対人的結果には援助行動等が含まれる。

デイヴィスは共感に関連するさまざまな定義や研究をもとに、empathyを「他者の体験に対するある個人の反応を扱う一連の構成概念（Davis, 1994/1999）」と定義し、IRIや組織的モデルを考案したのだが、この定義は他の研究者の定義よりも範囲が広い。組織的モデルの中で共感の概念と最も関係が深いのは「過程」と「個人内的結果」であり、通例は、対人的結果は共感概念に含めない。また、デイヴィスの定義だと、他者の苦しみを喜ぶシャーデンフロイデや他者の喜びに対する嫉妬なども除外されないことになる。しかし、こうした反応は、通例はempathyの定義には含めない。日本語の「共感」も「共に感じる、感情を共有する」というのが中心的な意味なので、嫉妬等の含意はないと考えられる。このように概念の範囲を広く捉えすぎている面はあるが、組織的モデルは、共感に関連する概念を整理し、共感の関連要素がどのような関係にあるのかを考える上で有用な枠組みであると考えられる。

## 道徳性や向社会的行動における共感の役割

登張（2022）では、ロジャーズとコフォートの理論、フェッシュバックの研究、社会化の理論と研究をもとに、共感がヒトの発達に果たす影響について検討したが、本稿では最初に、ホフマンやデイヴィスの理論で強調されている共感の役割について検討する。

ホフマン（1987, 2000 菊地・二宮訳 2001）は、道徳性や向社会的行動における共感（empathy）の役割を特に強調した。苦しんでいる他者を見た人は共感的に反応したり、援助行動を示したりすることを示すエビデンスは多数存在する。ヒュームとスミスも、sympathyと道徳性が緊密な関係にあることを述べており、道徳性や向社会的行動と関連するものとしての共感（empathy）の観念は、sympathy概念と深く結びついていると考えられる。ホフマンはさらに、上に述べたように、同情的苦痛、共感的怒り、罪悪感、共感的不正義など、さまざまな道徳的感情について言及するとともに、道徳原則が共感的感情と結びつくことで、抽象的な原則が感情によってチャージされ、「熱い認知」となって、道徳的行動への動機づけが高まり、道徳的判断や意思決定にも影響を与えるだろうと述べた（Hoffman, 1987）。

バトソンらのグループ（Batson, O'Quin, Fultz, Vanderplas, & Isen, 1983）は、大学生を対象に、苦痛を示す他者（被害者）を見せ、反応を、共感的関心と個人的苦痛を表す形容詞から成るチェックリストで測定した。その場を容易に離れることができる条件と離れにくい条件を設定し、被害者を助ける機会を与えたところ、前者の条件では、形容詞チェックリストで共感的関心への反応が優位だった群の多くは、被害者を助ける申し出をしたのに対し、個人的苦痛を示す形容詞への反応が優位だった群では、そうした申し出をする者は少なかった。一方、後者の条件では両群に違いは見られなかった。このことから、共感的関心は援助への愛他的動機づけをもたらす（他者の苦痛を減らしたいと思う）のに対し、個人的苦痛は自己中心的動機づけをもたらす（共感に

よって生じた自分の苦痛を減らしたいと思う」と結論づけられた。

デイヴィスが作成した IRI の共感的関心尺度と個人的苦痛尺度は、バトソンらの研究で用いられた共感的関心と個人的苦痛反応に対応している。なお、個人的苦痛の概念は、ホフマン(1984, 2000/2001)の自己中心的共感(発達の未分化な共感を表す)に関連づけて捉えることもできる。

向社会的行動についての代表的研究者であるアイゼンバーグは、共感性が向社会的行動に及ぼす影響についての研究を数多く行っている。向社会性の発達についての15年にわたる縦断研究のうち17-18歳時と19-20歳時の調査(Eisenberg, Carlo, Murphy, & Van Court, 1995)では、向社会的道徳的推論についてのインタビューと質問紙(Carlo, Eisenberg, & Knight, 1992)への記入、IRI(Davis, 1983)の視点取得、共感的関心、個人的苦痛尺度、愛他性尺度(Rushton, Chrisjohn, & Fekken, 1981)等への記入が求められた。なお、アイゼンバーグらは共感的関心尺度を sympathy 尺度として使用している。それによると、視点取得と sympathy は快楽的推論と負の関係を示し、道徳的推論合成得点と正の関係を示した。視点取得は承認志向と負、役割取得と正の関係を示した。個人的苦痛は道徳的推論のどの測度とも有意な関係を示さなかった。道徳性は視点取得、sympathy と正の関係にあり、個人的苦痛とは関連しないことが示唆された。

デイヴィス(1994/1999)は組織的モデルの構成概念を用いて、役割取得教示と援助の関係や観察者とターゲットの類似性と援助の関係等を検討する研究を紹介している。

社会心理学の分野では、道徳性や向社会的行動において果たす共感の役割が注目されることが多いことが分かった。こうした共感の役割には、「他者の苦痛を軽減したいという意識」(Wispe, 1986)という sympathy の含意が機能している可能性がある。

## 臨床心理学における共感の概念

ここで、臨床心理学における共感の概念のうち、サリヴァンとロジャーズとコフートの定義について簡略に述べる。

臨床家のサリヴァン(1953 中井他訳 1990)は empathy の概念を、「母親の中に不安の緊張があるとき、乳児の中に不安を誘導する」という対人間の過程を表す用語として用いた。この用い方は一般的ではないが、人の気持ちが別の人に伝わる非言語的プロセスの一つとしてこの用語を用いたのだと考えられる。

クライエント中心療法を提唱したロジャーズ(1975)は、共感(empathy)を「他者の私的な知覚世界の中に入り、完全にくつろいで、他者の中に流れている意味の変化や、彼自身もほとんど気づいていない意味を感じ取り、その理解を他者に伝え、受け取った反応によって理解が正確かどうか点検し、確認していくことだ」と述べた。

精神分析家のコフートは、共感(empathy)を「代理的内省」または、「ある人が客観的な観察者の立場を保持しながら同時にもう一人の人の内的人生を経験しようと試みること」と定義した(Kohut, 1984 本城・笠原訳 1995)。コフート(1959 伊藤訳 1987)によると、外的世界は感覚器官や道具の助けを借りて探究することができるが、内的世界は感覚器官の力では観察できず、われわれ自身の内省と他者への共感(empathy)によってのみ観察できる。精神分析的心理学の基本的な前提は、その基礎に共感と内省を置いていることで、注意深い観察を強調することによって、理論と観察が互いを豊かにする交流を再生させる(Kohut, 1978 林訳 1996)。コフートはさらに次のように述べている。共感とは、人間が他者の心理学的なデータを収集するた

めの機能様式の一つで、他者が自分の考えや感じを述べるときに、直接観察できないとしても、彼らの内的体験を推し量ることである (Kohut, 1978/1996)。

## 他者理解における共感の役割

サリヴァンの「母親の不安が乳児に伝わるメカニズム」としての empathy の定義は、ホフマンが述べた「反応的泣き」同様、発達初期から見られる対人間で感情状態が伝わるメカニズムの一つを表しており、他者理解の発達につながるものとも言えるかもしれない。ロジャーズの empathy は、他者の内面に入り込んでいると想像し、他者の内側から、他者の視点を取って他者の立場に立って、他者自身も気づいていない他者の深層の内面を想像し、それを言葉に表して表現し、他者が自分の気持ちを表していることを確認するまでの過程を示す概念である。視点取得や役割取得を含み、深い他者理解を目指し、理解の正確さも目指している。コフォートの empathy は、他者の話を真摯に聞き、代理的内省を通して、他者を深く理解し、その理解を伝え、他者自身の自己理解と成長を支援しようとするもので、視点取得や役割取得も含まれている。

臨床心理学の分野では、このように他者理解に果たす共感の役割が強調されることが多い。empathy の「他者の主観的体験を理解しようとする意識的試み」(Wispé, 1986) という含意が重視されていると考えられる。

しかし、ロジャーズやコフォートの empathy には、他者理解だけでなく、他者によりそい、他者を支援しようとする sympathy の含意にも合致する部分も含まれていると考えられる。

なお、カウンセリングにおける共感の役割のほか、さまざまな共感 (empathy) の役割について検討したカツ (1963) は、sympathy について次のように述べている。empathy では、自分の注意を他者の気持ちや状況に焦点づけるが、sympathy では、自分自身の気持ちと他者の気持ちの間に仮想された二重性や類似性に没頭し、他者の状況の客観的事実や性質にそれほど関心を持たず、他者を理解することは目的とならない。sympathy には認知過程としては欠点があると指摘した (Katz, 1963)。

## 共感性の発達について

社会心理学や発達心理学等における共感概念と臨床心理学における共感概念には若干の違いがあり、社会心理学や発達心理学では、道徳性や向社会的行動等における共感の役割が、臨床心理学では、他者理解における共感の役割が主に強調されてきたことが分かった。

しかし、両方の分野の共感には共通点もあり、共感が果たす役割にも共通点があると考えられる。社会心理学や発達心理学等では、主に大部分の人に見られる、比較的単純で身近な共感を扱っている。臨床心理学では、クライアントの深層心理を理解し、クライアントの治療と成長を目指す専門家としてのセラピストの共感を主に扱っている。この二つの共感には大きな違いがあるが、前者は後者の基盤になるのではないかと考えられる。

社会心理学や発達心理学における共感の重要理論であるホフマンの共感の発達理論は、他者理解の発達を扱っているとも言える。そこで、この4段階モデルに加えて、さらに進んだ次の段階(5)として、セラピストが示すような共感の段階を組み入れた共感の発達モデルを考えた。

(5) 自分とは全く異なる視点と経験を持ち、悩みを抱えている他者の話を聞き、寄り添って、



他者自身が気づかないような深層についても気づき、相手の身になって理解し、言葉に表して伝え、支援しようとするような共感のレベルである。

そうした共感、セラピストにとっても簡単ではなく、このような共感のレベルに達するのはごく少数であると考えられる。さらに実は成人でも、その前の（３）他者の気持ちへの共感や、（４）他者の一般的生活条件への共感に十分達していない場合も少なくないのではないだろうか。共感を全く欠いている人は少ないが、自分のことで精一杯だったり、他者の考えや視点、経験等が自分のそれとは異なることに気づかなかったり、他者の苦境に気づかなかったりすることは多いと考えられる。

コフート（1959/1987）は、他者の内面は共感によって観察し知識を得るのだと述べた。かつて、心理学は人間の内面を扱うべきではなく、行動のみを対象とするべきだと言われたこともあった。行動主義も条件づけも人間を理解するのに役立つ考え方の一つだが、人間の内面を直接扱おうとする心理学も重要である。そうしたことを検討する流れも脈々と続いてきたのである。他者理解は心理学の大きな役割の一つでもある。共感性の涵養と育成は重要な課題であると考えられる。

### 共感が果たすその他の役割について

登張（2022）では人の発達において共感が果たす役割について、本稿では、社会心理学等で重視されている道徳性や向社会的行動において共感が果たす役割と、臨床心理学等で重視されている他者理解において共感が果たす役割について検討してきたが、共感はこのほかにもさまざまな役割を果たしている。

たとえば、私たちは映画やドラマを見て、または小説を読んで、自分がその登場人物になったような気分になって一喜一憂したり、歌の歌詞に自分の身を重ねたり、運動選手を応援して試合に夢中になったりする。これも共感である。多次元的共感性尺度の次元ではファンタジーが、こうした共感を表している。一人の人間の経験は限られているが、他者の経験や活躍、文学や映像作品などに身を重ねることで、自分が体験できないことを擬似体験したり、自分の心の中の表現できなかった感情を体験したりすることができる。これも共感の重要な役割の一つである。

大きな災害に襲われた人々や紛争や戦争、政治的圧力に苦しんでいる人々、親に虐待された子どもなどに対して、世界中の多くの人々が心を痛めたり、支援しようとしたりするのを、私たちは目撃している。これは共感の明白な表れであり、人々が共感していることを表している。こうしたことは向社会的行動や他者理解とも関連している。身近な共感現象に気づくことも重要である。

### 引用文献

- Batson, C. D., O'Quin, K., Fultz, J., Vanderplas, M., & Isen, A. M. (1983). Influence of self-reported distress and empathy on egoistic versus altruistic motivation to help. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 706-718.
- Carlo, G., Eisenberg, N., & Knight, G. P. (1992). An objective measure of adolescents' prosocial moral reasoning. *Journal of Research on Adolescence*, 2, 331-349.
- Darwin, C. R. (1871). *Decent of man, and selection in relation to sex*. United Kingdom: Joh Murray. (ダーウィン, C. D. 池田次郎・伊谷純一郎訳 (1967) . 人類の起源 今西錦司 (責任編集) 世界の名著 39 中央公論社)
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of*

- Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- Davis, M. H. (1994). *Empathy: A social psychological approach*. New York: Brown & Benchmark. (デイヴィス, M. H. 菊池章夫訳 (1999). 共感の社会心理学：人間関係の基礎 東京：川島書店)
- Eisenberg, N., Carlo, G., Murphy, B., & Van Court, P. (1995). Prosocial development in late adolescence: A longitudinal study. *Child Development*, 66, 1179-1197.
- Feshbach, N. (1987). Parental empathy and child (mal)adjustment. In N. Eisenberg & J. Strayer (Eds.) *Empathy and its development*. Cambridge: Cambridge University Press. (pp.271-291).
- Freud, S. (1921). *Massenpsychologie und Ich analyses* (フロイト, S. 小此木啓吾訳 (1970). 集団心理学と自我の分析 (pp.195-253) フロイト著作集 6 京都：人文書院) p.224, 226.
- Hoffman, M. L. (1984). Interaction of affect and cognition in empathy. In C. Izard, J. Kagan, & R. B. Zajonc (Eds.) *Emotions, cognition, and behavior*. Cambridge: Cambridge University Press. (pp.103-131)
- Hoffman, M. L. (1987). The contribution of empathy to justice and moral judgment. In N. Eisenberg & J. Strayer (Eds.) *Empathy and its development*. Cambridge: Cambridge University Press. (pp. 47-79).
- Hoffman, M. L. (2000). *Empathy and Moral Development*. Cambridge: Cambridge University Press. (ホフマン, M. L. 菊池章夫・二宮克美訳 (2001). 共感と道徳性の発達心理学：思いやりと正義とのかかわりで 東京：川島書店)
- Hume, D. (1740). *A treatise of human nature*. London: Longman. (ヒューム, D. 石川徹・中釜浩一・伊勢俊彦訳 (2019). 人間本性論 第2巻 情念について 東京：法政大学出版局)
- Katz, R. L. (1963). *Empathy: Its nature and uses*. London: The Free press of Glencoe Collier-Macmillan Limited.
- Kohut, H. (1959 伊藤洸訳 1987). 内省・共感・精神分析 P. H. オーンスタイン編 コフト入門 東京：岩崎学術出版社 (pp. 25-50)
- Kohut, H. (1984). How does analysis cure? Chicago: The University of Chicago Press. (コフト, H. 本城秀次・笠原嘉監訳 (1995). 自己の治癒 東京：みすず書房)
- Kohut, H. (1978 林直樹訳 1996) 自己心理学とヒューマニティ 東京：金剛出版
- Lipps, T. (1906). Das Wissen von fremden Ichen. *Psychologische Untersuchungen*, 4, 694-722.
- McDougall, W. (1908). *An introduction to social psychology*. London: Methuen.
- Rushton, J. P., Chrisjohn, R. D., Fekken, G. C. (1981). The altruistic personality and self-report altruism scale. *Personality and Individual Differences*, 2, 1-11.
- Rogers, C. R. (1975). Empathic; Unappreciated way of being. *Counseling Psychology*, 5, 2-10.
- Sullivan, H. S. (1953). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton & Company, Inc. (サリヴァン, H. S. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鍾幹八郎訳 (1990). 精神医学は対人関係論である 東京：みすず書房)
- Titchener, E. (1909). *Elementary psychology of the thought processes*. New York: Macmillan.
- Titchener, E. (1922). *A beginner's psychology*. New York: Macmillan.
- 登張真稲 (2021). 同一視と共感との関連性 文教大学生生活科学研究, 43, 111-123.
- 登張真稲 (2022). 同一視と共感がヒトの発達において果たす役割について 文教大学生生活科学研究, 44, 43-55.
- Wispé, L. (1986). The distinction between sympathy and empathy: To call forth a concept, a word is needed. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 314-321.